性惡思想の創唱者は智顗か灌頂か

——安藤谷大教授の反論に對する疑問——

佐藤哲英

（昭和三十九年十月一日發行）に「如來性惡思想の創唱者—灌頂說への反論—」として發表されている。更に第十六回大會でも「天台智顗の佛身論」なる題下に、本題に關連した發表がなされた。安藤博士の主張を要約すると、如來が修惡を斷じても、性惡を本具するという言葉そのものは觀音玄義にのみ說いてあるが、如來性惡の思想自體は法華玄義にも充分に示されており、智顗晩年の著作たる淨名玄義の四敎義の部分にも、維摩經玄疏や文疏にも强調しているので、如來性惡の思想は觀音玄義のみの獨說ではない。しかも智顗は少年時代から熱烈な觀音信者で、普門品の講說を數度行なつた形跡があるが、灌頂には觀音信仰があつた形跡なく、また普門品に格別な關心をよせた記錄もない。そればかりか涅槃經玄義や涅槃經疏などの灌頂の著作にはどこにも性惡思想が見られず、また觀音玄義は涅槃經疏の著者灌頂の能力では說くことの出來ない深遠雄大な思想を展開しているから、どうしても

一

如來は修惡を斷じつくすも性惡を本具するという思想は、天台敎學の根本原理である性具思想の上に立つて、その必然的歸結として主張されたものではあるが、この性惡の思想はただ觀音玄義にのみ說かれ、三大部その他の天台大師の著作には全く見られない特異の法門である。しかるに現行の觀音玄義を仔細に檢討すると、智顗の著作とは見がたく、むしろ門人灌頂の撰述であると考えられるので、この觀音玄義に見られる性惡說は、灌頂による敎學上の發揮と認むべきで、性惡說の創唱者は、灌頂に歸すべきものであろうというのが私の見解である。

これに對して、安藤俊雄博士は本學會の第十五回學術大會において「天台智顗と如來性惡說」なる題下で私の灌頂創唱說を批判され、その要旨は『大谷學報』第四十四卷第一號

智顗の講説と斷ぜざるを得ない。したがつて性悪思想自體が智顗晩年の諸著作に強調されているばかりか、觀音玄義も智顗の講説と斷ぜざるを得ないから、如來性悪思想の創唱者は智顗でなくてはならぬと強く主張されている。

しかも安藤博士が私の灌頂創唱説に鋭い批判を加えられた第一の主要點は、觀音玄義の通釋段における觀音の十義についてである。私はこの觀音の十義すなわち①人法、②慈悲、③福慧、④眞應、⑤藥珠、⑥冥顯、⑦權實、⑧本迹、⑨緣了⑩智斷の十雙が、嘉祥の法華玄論における二十雙や、法華義疏の十雙と關連をもつものとみられるので、恐らく嘉祥の説に導かれて組立てられたものとしたのに對し、安藤博士は觀音十義の名目と義理が智顗晩年の著作である維摩經玄疏や大部四教義のなかにすべて説かれているので、決して嘉祥の説に導かれたものではない。むしろ法華玄論の二十條義こそ智顗の維摩經玄疏や文疏によつて組織されたものと推定されている。

次に博士の指摘された第二點は別釋段の普門十義についてである。私はこの觀音玄義における普門十義すなわち①慈悲普、②弘誓普、③修行普、④斷惡普、⑤入法門普、⑥神通普⑦方便普、⑧説法普、⑥供養諸佛普、⑩成就衆生普なる十普も法華玄論の二普や法華義疏の三普とのつながりが考えられるので、これまた嘉祥の説に導かれたものとしたのに對し、博士は別釋段の普門十義も智顗が五十八歳の時に撰述した大部四教義の初發心住の功德を説く十種法門によつて組織されたもので、決して嘉祥の説によつたのではない。むしろ嘉祥の法華玄論における二普や法華義疏における三普は、天台の大部四教義によつた形跡がないので、恐らく維摩經玄疏や維摩經文疏によつたと推定するのが妥當であろうとされている。特に敍上の二點については一々詳細な資料をあげて私の主張を反論され、かくの如き觀音玄義はどうしても智顗の講説と斷ぜざるを得ないと結論されている。

いま安藤博士の論文を拜見すると、その論旨は透徹し一々首肯すべきものばかりであるが、それにもかかわらず觀音玄義の成立について、現行の觀音玄義が果して智顗の講説を筆錄したものかどうかについては、文獻論の立場からにわかに博士の見解に贊意を表しかねるので、ここに三つの疑問を提示して博士並びに大方の示教を仰ぎたいと思う。

二

灌頂の天台智者大師別傳によると、智顗は年七歳にして喜んで伽藍にゆき、諸僧の普門品の初段を口授するのを一徧でおぼえたというから、幼少時代から普門品との因緣があつたことが知られる。觀音義疏の卷頭にはこの普門品を序・正・流通の三段に分つ有人二家の説をあげた後に「今師ある時に

は亦三段となす。ある時には三段の名を作さずして、但分つて三章となす。……或は四章となす」とあり、法華文句の普門品の釋でも「今師は四解をなすも論に乖かず」とあるので今師すなわち智顗に普門品に關する數種の分科説があつたことは灌頂の傳えるごとくであろう。これによつて智顗にいくたびか普門品の講説があつたことは推察されるが、それにもかかわらず、現行の觀音玄義が果して智顗の講説を筆錄したものであるか否かには疑いなきを得ないものがある。

たしかに觀音玄義の撰號は「隋天台智者大師説、門人灌頂記」となつている。これを文字通りにとれば、智顗の講説をば灌頂が筆記したということになるが、この觀音玄義のはじめには、「大部既に五章あつて義を明す。今品も例して此をもつて釋す」とあつて、大部すなわち法華玄義に基づいて五重玄義を立てており、「大本玄義」「大本玄」「大本」等と明らかにその名をあげて詳説を法華玄義にゆずつたところが十五箇所ある。もし本書が智顗の講説であるとすれば、それは法華玄義の講説すなわち隋の開皇十三年（五九三）以後、智顗が入寂した開皇十七年（五九七）までのこととせねばならぬであろう。ところが觀音玄義なる文獻をすなおに讀んでみると、私にはこれを智顗の講説のままの筆錄だとうけとれぬものがある。今もし一歩ゆずつてこれを智顗の講説だとすると、觀音玄義の講説では重要教義の名目だけをあげて、「かくの如き等の義は具に大本にあり」とか「これ具に大本玄義に出づ」とか「具さに論ずること彼の玄義にあり」等と云いその要目についてはほとんど説明を加えなかつたことになる。果してこれが實際に行なわれた講義であつたとしたら、開皇十三年に荊州で行なつた法華玄義で既に講説しておいたから詳細はそれにゆずるとか、今は省略するといつたことになる。そのような講説も全くあり得ないものではなかろうが、それが一箇所か二箇所のことならともかく、かかる箇所が十五回もあるというにいたつては、全く講義としては獨立の意味をもたぬものといわざるを得ない。しかもこれを強いて智顗の講説であるというならば、それは師として甚だ不親切な講義であつたというべく、門人にとつては甚だ意の通じにくい講義であつたであろう。

しかるに本書をもつて、法華玄義の成立以後にこれを有力な指南書とし、法華玄義を座右に置き、灌頂がこれを參照しつつ書き下した撰述とみるとすれば、上述の如き矛盾もたちまち解消されるので、むしろこの方が文獻的には無理がなかろうというのが、私の觀音玄義灌頂撰述説の重要論據である。私も既に述べたように智顗に觀音經の講説があつたことは認め、灌頂自身がこのことを記しているので、灌頂がこの講錄を整理して本書を記述したものではないかとも考えてみたが、少くとも現行の觀音玄義は智顗の講説の聽記本というよ

りも、灌頂自身が筆をとつて書き下した撰述であるとみる方が文獻的にはすなおな見方であり、また事實に近いものとするのが私の見解である。從つて安藤博士の指摘されたように、觀音の十義や普門の十義は智顗晩年の諸撰述に共通した思想だからといつて、觀音玄義そのものを智顗の講說だとする見解には直ちに贊意を表し難いものがあるが、博士は觀音玄義智顗撰述說を文獻的に立證する根據をいずれにおいておられるのであろうか。これがお尋ねしたい第一の疑問である。

三

前述の論文において安藤博士が指摘されたように、觀音玄義における觀音の十義や普門の十義は、私が考えたように嘉祥の法華玄論や法華義疏の影響ではなく、智顗晩年の諸著作すなわち大部四教義、維摩經玄疏、維摩經文疏に見られる思想であるとするも、嘉祥の法華玄論の普門品の釋は智顗の維摩經玄疏や文疏に據つたものであると斷定するのが妥當であるとされているのは、これを年代的に見て少しく無理がありはしないかというのが、私のお尋ねしたい第二の疑問である。道宣の續高僧傳によると、嘉祥大師吉藏（五四九—六二三）は隋が天下を統一した頃（五八九）から會稽に移って嘉祥寺に住し、開皇の末年（六〇〇）に煬帝に召されて揚州の慧日道場に移っている。この間に會稽とほど近い天台山に再び歸つた智顗と親交を重ねたらしく、國清百錄には智顗におくつた吉藏の書狀を四通も收錄している。しかも、そのころの吉藏は法華經への關心が極めて高かつたようである。安藤博士も指摘されているように、吉藏の法華玄論が江南の地で撰述されたことは、吉藏自身が大乘玄論や淨名玄論に述べているところであり、法華統略によると、法華玄論十卷ばかりか、法華義疏十二卷も會稽で作られたもののようである。ことに開皇十七年（五九七）八月二十一日付の書狀こそは、吉藏が智顗を嘉祥寺に迎えて法華經の講義をしてほしいという要請書であるから、そのころの吉藏が智顗の思想教學に深い關心と敬意を拂つていたことは想像に難くない。そればかりか續高僧傳の灌頂傳には、灌頂が稱心精舍で法華を講ずるや、吉藏は義記を借り求めてこれを尋閱心醉し、講を廢し衆を散じて天台に投じ法華を受けたとあるので、古來天台宗では吉藏を、灌頂門下に數えているほどである。かかる所傳が吉藏の立場を正しく傳えたものではないとしても、吉藏（五四九—六二三）は智顗（五三八—五九七）よりも十一歲の年少であり、嘉祥の仁王疏には開卷第一に「天台智者於二衆經中一闡明二五義一。今於二此部一。例亦五門分別」と述べて、明らかに天台智顗の五重玄義を踏襲している實例も見られるところから、嘉祥には少なからぬ智顗の思想的影響があつたにちがいないと

するのが、從來の一般的な見解であつたようである。かかる考え方に立つとき、嘉祥の法華玄論に見られる二十條義は、智顗の維摩經玄疏や文疏によつたものであるとされる安藤博士の歴史的根據に基づく見解は、一應妥當なもののように感ぜられる。

しかるに、維摩經玄疏と維摩經文疏は未完成のままで智顗は開皇十七年（五九七）十一月二十四日に入寂し、これを門人の灌頂と普明が持參して隋の煬帝に獻上したのは開皇十八年（五九八）正月二十日頃であるから、この兩書の流布はそれ以後であつたとすべく、しかも嘉祥は開皇二十年（六〇〇）には會稽を後にして揚州に移つているとなると、この一兩年の間に嘉祥はこの兩書を讀み、法華玄論を撰述したものとせねばならぬことになる。この當時における學者間の思想交渉は、今日のわれわれの想像以上に敏感であつたらしいので、かかる思想影響も決してあり得ないことではないと思うが、もしもかかる立論を積極的に主張するためには、この二十條義以外にも、かくの如き智顗の維摩經疏からの影響が嘉祥の法華玄論に見られると、いくつかの事例を指摘して下さつて、これらを傍證として立論を推しすすめるべきではなかろうか。

なお天台と嘉祥との思想交渉の問題はすこぶる複雜微妙なものがあり、隋代佛教思想を解明する重要課題の一であると考えているので、安藤博士ばかりでなく斯界の諸學者の御見解を承りたいと思うが、天台の法華玄義及び法華文句と、嘉祥の法華玄論及び法華義疏の關係については、文獻論の立場から拙著『天台大師の研究』（三〇二―三六三頁）に私見をのべておいたので、讀者諸賢の御參照を得ば幸いである。

四

安藤博士はまた前記論文の最後に、「天台の學說と如來性惡思想との必然的關係」なる一節を設けて、示唆にとむ論述をされている。博士によれば、如來性惡說は智顗の根本原理たる性具思想の必然的な展開であつて、性具說の世界觀的展開が十界互具說であり、止觀的展開が一念三千說であるのに對し、その佛身論的展開が如來性惡說であるとの見解に立ち、如來性惡の思想自體は法華玄義の感應妙や神通妙のところに充分示されており、大部四教義や維摩經玄疏、維摩經文疏などの智顗晩年の著作には、如來や菩薩が性惡を本具することを强調しているから、如來性惡思想は決して觀音玄義のみの獨說ではない。これに對し門人の灌頂には、涅槃經玄義や涅槃經疏などの著作のどこにも性惡思想を見出すことが出來ないばかりか、灌頂には觀音信仰があつた形跡がなく、また普門品について格別な關心を寄せたという記錄もないと强調されている。

たしかに灌頂の涅槃經玄義や涅槃經疏のうちには、當然性惡說にふれてしかるべき個所が存在するのにかかわらず、その思想の片鱗すら見出すことが出來ないことは、私も同じく異樣の感を持つものである。けれども、灌頂の著作のどこにも性惡思想が見出されないからといつて、性惡說のある觀音玄義は灌頂の著作ではないとし、觀音玄義は涅槃疏の著者灌頂の能力では說くことの出來ない深遠雄大な思想を展開しているので、どうしても智顗の講說したものと斷定せざるを得ないとされているが、果して觀音玄義と灌頂とは博士の主張の如く切り離して考えてよいものかどうか。これが私のお尋ねしたい第三の疑問である。

安藤博士は思想的立場に立つてものをいわれ、私は文獻的立場からものをいうようであるが、博士は觀音玄義の「隋天台智者大師說、門人灌頂記」なる撰號をどのように考えていられるのであろうか。この撰號は後人の置いたものだとして、「門人灌頂記」なる五文字を抹殺し、觀音玄義の私記者をば灌頂以外に求めようとされるのか。或はまた性惡思想の著しく稀薄な灌頂でも、深遠雄大な思想をふくむ觀音玄義の講說の筆錄程度なら可能と考えていられるのか。それともまた、大部四教義等と同樣に、觀音玄義をも智顗自身がみずから筆をとつた親撰書の一つと考えていられるのか。この邊のところを御示教ねがいたいと思うのである。

以上私は安藤博士の反論に對して、まことに無躾な表現をもつて三つの疑問を提示した。すなわち、

（一）觀音玄義の智顗撰述說を論證する文獻的根據はいずれに求めていられるのか。

（二）吉藏の法華玄論における觀音の二十雙義が智顗の維摩經疏によつたとするのは、法華玄論を吉藏の嘉祥寺時代の作とするかぎり、年代的に無理がないか。

（三）觀音玄義は涅槃疏の著者灌頂の能力では說き得ない深遠雄大な思想を展開するといわれるが、然らば觀音玄義は智顗の親撰とみられるのか。或はまた灌頂以外に私記者を考えていられるのか。

結局のところは、觀音玄義なる文獻はいつたい智顗の著作なのか、それとも灌頂の著作なのか。それはいついかなる事情のもとに述作されたのかという文獻成立の問題をまず明らかにすることが、性惡思想の問題を論ずる前提條件であると考えているので、觀音玄義の成立について博士がどのような見解をもつていられるかを承りたいのである。私は觀音玄義をもつて灌頂自身が筆をとつた著作とみたために、そこに見られる性惡說を灌頂の創唱發揮としたのであるが、觀音玄義は智顗の撰述に間違いないとの結論が出るとすれば、いさぎよく兜をぬいで智顗創唱說に從うことに、いささかも吝かでないことを記して筆を擱く次第である。